

# 母犬

小川未明

青空文庫



どこから、追おわれてきたのか、あまり大おおきくない雌めす犬いぬがあり  
 ました。全ぜん身しんの毛けが黒くろく、顔かおだけが白しろくて、きつねかざるに似に  
 て、形かたちは、かわいげがないというよりは、なんだか気味きみ悪いわる気が  
 したのであります。だから子こ供どもたちは、この犬いぬを見みると、石いしを拾ひろ  
 って投なげついたり、なにもしないのに、追おいかけたりしました。  
 犬いぬはますますおどおどとして、人ひとの顔かおを見みれば逃にげるようになり  
 ました。

ペスやポチは、みんなからかわいがられているのに、なぜ、こ  
 の犬いぬだけ、みんなからきらわれるのだらうかと、敏としちゃんは、ふ  
 と、犬いぬを見みたときにかんが  
 考えたのでした。自分じぶんだって、このあわれな

犬をいじめたことがあるのですが、考えると、わるいことをした  
ような気がしたのです。

「こんどから、僕は、もう、あの犬をいじめないことにしよう。」  
と、敏ちゃんは、思いました。

ところが、偶然にも、ある日、敏ちゃんのうちのお勝手も  
へ、その顔だけ白い犬がやってきてのぞきました。よほど、おな  
かがすいていたとみえて、なにかたべるものをさがしていること  
がわかりました。

「まあ、なんて、気味のわるい犬でしょう。」と、女中がい  
つて、水をかけようとしたのを敏ちゃんは、やめさせました。そ  
して、

「まっでおいで！」と、犬いぬに向むかっていいながら、奥おくへ入はいって、昨夜さくや、食たべ残のこしてあつたパンを持もつてきました。

パンは、もう堅かたくなつていましたが、このおなかのすいた犬いぬにとつては、どんなにかおいしいごちそうであつたでしょう。犬いぬは、敏としちゃんの、しんせつにいってくれた言葉ことばがわかつたようにじつとして、待まつていました。

「さあ。」と、いって、敏としちゃんはパンの一切ひときれを犬いぬに投なげてやりました。

犬いぬは、喜よろこんで食たべると思おもいのほか、それを口くちにくわえると、あわただしく、逃にげていってしまいました。

「それごらんなさい、坊ぼっちゃん、まあ、なんて、にくらしい犬いぬで

しよう？」と、女中は、あきれました。

「ほんとうに、やな犬だね。」と、敏ちゃんもあんな犬に、なにもやらなければよかった、ああいう犬だから、みんなに、いじめられてもしかたがないのだという考えが起こったのであります。

「もう、きたって、なんにもやるものか。」と、敏ちゃんはいいました。

ある日、敏ちゃんは、学校から帰りに、この犬が、やはりなにかくわえて、わきめもふらずに原っぱをかけて、あちらのすぎ林の中へゆくのを見ました。

「どこへゆくのだろうか。」と、敏ちゃんは、思いました。

このとき、林の中から、ワン、ワンという、犬のなき声がきこ

えてきました。敏ちゃんとしは、きつと犬いぬどうしのけんかが起おこつたのだろうと思おもいましたから、すぐいつてみる気きになつてかけ出だしました。そして、林はやしに近ちかづくつと、そつと中なかのようすをうかがいました。

すると、どうでしょう、そこには二匹ひきの小犬こいぬがいて、いま母はは犬いぬのもつてきてくれた、魚さかなの骨ほねを争あらそいながら、小ちいさな尾おをぴちぴちとふつて喜よろこんでたべているのでした。

「あ、わかつた！ このあいだのパンも、自分じぶんがたべずに、小犬こいぬのところへ持もつていったのだ。」と、敏ちゃんとしは知しりました。

母犬ははいぬは、自分じぶんがたべずに、子供こどものたべるのを見みて、さも満まんぞ足くしているようでしたが、この間あいだにも、たえず、林はやしの外そとの方ほうへ

気をくばって、もしや、どこからか敵がおそつてきはしないかと、  
注意を怠りませんでした。

敏ちゃんは、これを見て、母犬の子供に對するやさしい愛  
情は、人間のお母さんが、子供に對するのと、すこしも變わ  
りのないのに、ひどく感心しました。

敏ちゃんは、この平和な犬たちをおどろかしてはならないと、  
そつと、その林からはなれました。

それから、敏ちゃんは、この黒犬を心から愛するようになり  
ました。ほかの子供らが、この犬を見て石を投げようとすると、  
敏ちゃんはやめさせました。

「君、この犬は感心なんだよ。」と、自分の見たことを、話し

ました。これをきくと、ほかの子供たちも、

「りこうな、いい犬だね。」と、感心しました。

もう、子供たちは、この犬をいじめなくなりました。敏ちゃん  
 の家の女中も敏ちゃんから話をきいて、感心して、その後、  
 ペスやポチにやらなくても、魚の骨などを、この宿無しの、かわ  
 いそうな犬のくるまでとつておいてやりました。

「子供があつて、どんなにおなかが、すぐでしょう。」と、女  
 中は、同情しました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「母犬《ははいぬ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 母犬

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>